

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：執事とその資格③

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章11-13節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝も続けて学んでいきたいのは、I テモテ3章のみことばです。これまで約3カ月、11回にわたって学んできた霊的リーダーのあるべき姿についてのシリーズもあと少しで終わりを迎えようとしています。16節までのシリーズ全体としては、きょうを含めて、あと3回かけて見ていきたいと思っていますけれども、私たちがきょう考えていく11-13節をもって霊的リーダーの資格に関することは一旦おしまいになります。

このシリーズを始めるに当たって皆さんに四つのことを覚えていてくださいとお願いしました。一つ目に言ったことは、テモテ3章に記されている基準は、監督や執事といった霊的リーダーだけのものではなく、すべてのクリスチャンに当てはまるものだということでした。だからこそ、たとえこの先リーダーになってもならなくても、私たちはここに描かれている霊的に成熟した者の姿を目指して成長していくことが大切だったのです。パウロのことばを通して、以前よりも自分の罪や弱さ、成長しなければいけない部分がはっきりと見えてきたでしょうか？また、自分がどれほど神様の助けを必要とする存在なのかということも、これまでよりもはっきりと覚えることができたでしょうか？

二つ目に言ったことは、このテモテ3章は、霊的リーダーである監督また執事という存在がどのようなものなのかをはっきりと教えてくれているということでした。パウロのことばを通して、教会で働くリーダーがどのような存在なのかということを理解することができたでしょうか？神様がどんな人物を教会のリーダーとして求めておられるのかをより深く考えることはできたでしょうか？

三つ目は、特に男性の皆さんに対して、このテモテ3章に記されているリーダーの姿を追い求めてくださいということでした。パウロはここで個人としての信仰の歩みだけでなく、周りの人々との関わりにおいても、どのように霊的リーダーとして成長しなければならないのかを教えてくれていました。パウロのことばを通して、以前よりも家庭を愛し、リーダーとしての責任を果たしていきたいという思いが強められたでしょうか？職場や教会にあって、どんな模範を示していくことが神様に喜ばれることなのかをよりはっきりと見て取ることはできたでしょうか？

そして最後四つ目には、特に女性の皆さんに対して、テモテ3章に記されているこの姿をまず自分自身が目指してくださいということでした。しかし、それと同時に、特に結婚されている方であれば、ご自身の夫がこの箇所に記されている者へと成長できるように、愛をもって励ましてあげてくださいとお願いしました。パウロのことばを通して、これまでよりも自分のことばやふるまいにおいて、どの点のみことばからかけ離れているかを知ることはできたでしょうか？また、自分の夫とともに成長を目指していく者として、愛をもって励ます者へと少しでも成長することはできたでしょうか？

確かに、こうして私たちが神様の求めておられる霊的リーダーの資格、その基準について考え、自分自身の歩みと照らし合わせた時に、余りにもかけ離れている自分の姿を見て悲しくなったこともあったことだと思います。心が辛く責められることも多々あったことでしょう。私自身もそうです。メッセージを毎週用意するに当たって、自分の罪深さがますます明らかにされ、何度も何度も心を砕かれました。しかし、同時にこうやって私たちが神様の基準を見て、自分の罪深さを見る時に、どれほど神様があわれみ深く、愛にあふれたお方なのかと思いませんでした？本来であれば、私たちはみな生まれながら、その罪ゆえにただ神様の御怒りにのみ値する存在でした。私たちのうちには自分自身を救う手段などいっさいなく、ただ神様からの永遠のさばきを待つだけの希望なき者でしかありませんでした。しか

し、私たちがまだ罪人であった時に、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによって、神さまご自身の愛を明らかにしてくださり、そしてこの方を信じる信仰によって、私たちが義と認めてくださいましたのです。神様は私たちがどれほど罪深く、どれほど愚かで弱い存在なのかを知らなかったではありません。すべてのことをご存じでした。しかし、キリストが十字架にかかって、その血潮でもって私たちの罪をすべて洗い流してくださいましたのです。この方の犠牲のゆえに、私たちは今、神との平和を持って、新しく造り変えられた神の子どもとして歩んでいくことを赦されました。こんなすばらしい愛を神様は私たちに示してくださいましたのです。そんな偉大な愛を私たちが受けているのだとすれば、私たちの責任は、この方を見上げて、この方がみことばを通して教えてくださっていることに従順に従っていくことですよね？こんなすばらしい神様が喜んでくださる者にならなりたいと皆さんは願っておられるのです。確かに、私たちはいろいろな面で失敗をします。みことばを見ていく時に、罪深さも見えてきます。でも、私たちには神様から必要な助けを与えられている。このような罪深い者を神様は赦してくださいましたのだとすれば、こんなすばらしい神様のために歩んでいきたい、そのような成熟した者として歩んでいきたいと。私たちのうちには自分を変える力などありません。でも、私たちは神様にただ頼り頼み、罪を悔い改めながら歩んでいくことができます。そうやって私たちがここで記されている霊的に成熟した者の姿を目指して歩んでいく時にこそ、私たちはあふれんばかりの喜びを見出すことができます。こうしていろいろなことを考えてきました。チャレンジだったことも、責められることもあったことでしょう。でも、私たちはこの歩みにこそ神様のすばらしさを覚え、そしてそこに喜びを見出すことを知っているのです。私たちが救ってくださいましたその福音は、私たちが日々を歩んでいくための原動力となります。だから私たちはいつも福音に立ち続けることです。

では、そのことを改めて覚えた上で、執事の最後の資格を 11-13 節を通して見ていきたいと思えます。パウロは、この箇所を通して、大きく三つのことを私たちに教えてくれていました。一つ目に 11 節で女性執事について、二つ目に 12 節で執事の残りの資格について、そして三つ目に 13 節で執事に約束された報い、祝福について教えてくれていました。それぞれ順番にみことばを追って考えてみましょう。まずいつものようにみことばをお読みします。

### I テモテ 3 : 8 - 13

「:8 執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、:9 きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。:10 まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。:11 婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。:12 執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。:13 というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」

### ○女性執事とその資格 11 節

さて、執事に関する資格について、8-10 節で六つのものを述べた後、パウロは婦人執事について 11 節で述べ始めていました。

#### ●女性執事 or 執事の妻？

では、早速どんな霊的資格が挙げられていたのかを考えていきたいと思いますと言いたいのですが、その前にまずここで少し考えておきたいことがあります。それは、この 11 節の冒頭で「婦人執事」と訳されていることばが一体何を意味するかです。驚かれる方もいるかもしれませんが、実はここで「婦人執事」と訳されている元々のギリシャ語には執事という意味はありません。ここで使われていることばには、主に「大人の女性」とか、「妻」といった意味しか含まれていないのです。口語訳聖書を見ると、この箇所は「女たちも、同様に謹厳で、他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実でなければならな

い。」と訳されていますし、2017年度版の新改訳聖書では「この奉仕に就く女の人も同じように」と訳されています。また第二版の聖書の欄外には、別訳として「執事の妻」ということばが載っているのではないかと思います。ですから、このことばが元々「女性」を指すことばだからこそ、パウロはここで女性の執事のことを言っていると言う人もいれば、いやいや、パウロはここで執事の妻のことを言っているという二つの意見にわかれます。尊敬する先生方の間でも、二つの意見で割れていたりします。

パウロは女性の執事のことを言っているのか、それとも執事の妻のことを言っているのか、どちらの意味として考えることができるでしょうか？この1週間、私自身もいろいろな記事や注解書を通して学んでみました。そしてその結果、パウロがこの箇所で触れているのは、女性の執事だと現時点では考えています。幾つかの理由からそのことが言えます。

まず一つ目の理由として挙げられるのは、「婦人執事も」と訳されている、この「も」ということばです。先ほどお読みした2017年度版の方がよりわかりやすいかと思いますが、そこでは「女の人も同じように」と訳されていました。この箇所には、「～もまた」、「～も～と同じように」といった副詞が含まれています。ここで少し思い出してみてください。このことばは前回見た8節でも冒頭に「執事もまたこういう人でなければなりません。」と出てきていました。その時にも説明しましたが、1-7節を通して長老の資格に触れてきたパウロは、8節から執事の職について語る際に、教会全体を監督する長老は、こんな資格を必ず満たした人でなければいけませんと言ったのです。そしてこれと同じように、執事もこれから挙げる資格を必ず満たした者でなければいけません。パウロはこうして「～もまた」ということばを用いることによって、監督と執事の職を並べていました。長老はこうであるべきだ、このような基準を満たしていなければいけません。執事もまた、このような資格を満たしていなければいけません。そしてこれと同様に、パウロは11節で女性の執事も同じように基準を満たした人物でなければならぬと述べていたのです。ですから、こうして文脈を考慮する時に、8節と11節が全く同じものとしてつながっているのではなくて別のものを表している、執事の妻のことを言っているのではなくて、ここでパウロは女性の執事に触れていると考えることができます。

また二つ目の理由として挙げられることは、長老の資格の中で、妻について触れられていないということです。個人的にはこちらの方が理由として大きいですが、パウロは1-7節で長老の資格を語っていた時に、長老はこのような人物でなくてはなりませんと口にはしていましたが、長老の妻もこのような人物でなくてはなりませんとは述べていませんでした。もしパウロが11節で執事の妻について触れていたのだとすれば、少し不思議に思いませんか？教会全体を教導していくという、そんな重大な責任を負った長老に求めていることを果たしてパウロは執事にのみ求めるのでしょうか？ですから、この点を考慮しても、この箇所が執事の妻ではなくて、女性執事について語っているであろうと見て取ることができるのです。

また最後に、もう一つだけ理由を挙げるとすれば、フィベという女性が執事として仕えていた例を聖書の中で見て取ることができるからです。ローマ16:1に「ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。」と記されていました。フィベという姉妹が教会に仕える者、執事として仕えていたと書かれていました。ですから、パウロの時代、教会にあって女性が公の形で仕えていたという例をここで見て取ることができるのです。

このような三つの理由をもって、私たちはパウロが執事の妻に関して11節で述べようとしていたのではなく、女性執事について触れていたと考えることができます。

#### ●女性執事と四つの資格

そして、そんな女性執事に対しても、パウロは同じように基準を満たした、霊的に成熟した者であることを求めているのです。では一体どんな資格を女性執事に求めているのでしょうか？四つのことが挙げられているので一つ一つ見てみましょう。

## 1) 威厳があること

11節に「婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。」と記されていました。まず一つ目に挙げられていた資格は威厳があることでした。言い換えれば、女性執事は周りの人々から尊敬や称賛を集めるような歩みをしていることが求められていました。これと同じことを最近どこかで聞きませんでした？そうです。8節で執事の最初の資格として挙げられていた「謹厳」であるということと、この「威厳」があるというのには同じことばが用いられているのです。つまり執事として仕える者は男性であろうが、女性であろうが、性別に関係なく、そのふるまいやことば、態度などすべての面において、人々からの尊敬に値するような生き方を実践していることが欠かせないということです。その人物を目の当たりにした人たちが、外側の美しさだけを称賛するのではなく、その内側に尊敬を抱くような評判のよい歩みをしていることが求められていました。

ここで少し立ち止まって、いま一度よく考えてみてください。パウロは一体どれほど人々の前で称賛を受けるような歩みを重要なものだと考えていたと思います？振り返ってみれば、パウロは長老に対しても同じことを求めていました。男性執事に対しても求めていましたし、そして今回女性執事に対しても、もっと言えばすべての信仰者にも同じことを求めていました。人々の前で称賛されるような、尊敬されるような歩みをしていきなさいと。要するに、それだけ信仰者ひとりひとりがこの世でどんな証を立てているのかということが、神様の前に重要なものだという事です。こうして繰り返し同じ教えを見ているのですが、果たして私たちはパウロが抱いていたような、そんな強い思いを持って周りの者から称賛されるような歩みを目指して歩んでいるのでしょうか？私たちがそのような歩みを目指しているのは、私たち自身が褒められるためではありません。私たちに、この世にあって、人々の前であかしをしたい存在がいるからです。人々に知ってほしい大切なメッセージがあるからこそ、私たちはそのような歩みを追い求めているのです。

みことばもテトス2：2-8でこんなふうに言っていました。「：2 老人たちには、自制し、謹厳で、慎み深くし、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。：3 同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。：4 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、：5 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。：6 同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。：7 また、すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては純正で、威厳を保ち、：8 非難すべきところのない、健全なことばを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。」と。パウロはここで教会の老人や年取った婦人たち、また若い婦人や若い人々が信仰者としてどのように歩んでいくべきなのか、その姿を描いていたのですけれども、皆さんに注目してほしいのは、なぜ彼らが良いわざに励もうとするのか、その理由です。「それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。……そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。」と書いてありました。私たちが人々の前で尊敬されるような歩みをしていくことは、私たちの神様が、私たちの愛するみことばがそしられることのないためです。つまり、私たちが日々の歩みにおいて、慎み深く愛と忍耐を持って歩んでいくことも、家庭において夫や妻、子どもに対して優しくするということも、それぞれが神様から与えられた場所において忠実に仕えていくということも、ことばにおいても、ふるまいにおいても非難されるところのない模範となるということも、それらすべてのことは、私たちの愛する神様やみことばがそしられるのではなく、ふさわしい称賛を受けるために、私たちはそれらすべてのことをなしていくのです。

主イエス・キリストに救われ、この方によって買い取られた私たちは、キリストを代表する、キリストの使節として、今この世にあって生かされています。私たちはキリストによって買い取られた、キリ

ストを代表する者として日々歩んでいるのです。だとすれば、どんなキリストを私たちはあかししているのでしょうか？キリストが一方向的に与えてくださった愛や赦しを、人々に対しても表そうとしているのでしょうか？キリストが与えてくださった揺るがぬ希望や平安を人々に対しても示そうとしているのでしょうか？キリストが犠牲を払って、模範として残してくださったその従順や謙遜さを人々に対しても喜んで示そうとしているのでしょうか？私たちに問わなければいけない一つの質問はこうです。周りの人は私たちのうちに一体どんなキリストを見出すのかです。愛する神様がほめたたえられる、ただそのためだけに私たちは称賛される歩みを追い求めていくことです。威厳があることが、まず一つ目に人々の模範となる女性執事に求められていた資格でした。

## 2) 悪口を言わないこと

次に二つ目に挙げられていた資格は、悪口を言わないことでした。ここで特に覚えておきたいことは、悪口を言わないということには「中傷する」という意味を持った“ディアボロス”というギリシヤ語が使われているということです。“ディアボロス”ということばが普段新約聖書の中でだれのことを表わすのに用いられているのかご存じでしょうか？これは悪魔を表すことばです。イエス様もこのように言っていました。ヨハネ8：44でこのことばを用いて、「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」と。つまりパウロはここで女性執事となる者は、ことばにおいて悪魔のようになってはいけないと訴えていたのです。

悪口を言う人とはどんな人のことを言うのでしょうか。この人物はだれか別の人のことを本人のいないところで隠れて話し、その人の評判を傷つけようとする人です。その手段はさまざまです。嘘をついたり、間違っただけのうわさを流したり、時に内容が真実であったとしても、だれかを傷つけることを意図して話したり。「あのうわさを聞いた？」、「あの人はこんなことを口にしていた」、そう言って耳にしたありとあらゆることを、聞く必要もない人に告げるのです。考えてみてください。教会生活を行っていく上で、私たちはみんな罪を犯します。霊的リーダーであろうが、だれであろうが間違いを犯し、だれかを傷つけてしまうことがあります。そんな時に、私たちがいつも陰に隠れて、自分の受けたことをほかの人に話し、自分を傷つけた相手を非難するようなことを口にしているのだとすれば、そんな教会はどうなるでしょう？あの兄弟にこんなひどいことをされました、だから自分はこのことをほかの人に言う権利があると考えて、怒りや不満に任せて口にする必要もないことを聞く必要のない人に言っているのだとしたら、兄弟姉妹との関係は確実にねじれて壊れてしまいます。間違いなくそんな教会には争いや不一致といったものが絶えず起こるようになってしまうのです。

箴言でもこのようなことが言われていました。箴言26：20-21で「:20 たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。:21 おき火に炭を、火にたきぎをくべるように、争い好きな人は争いをかき立てる。」と。覚えておくべきは、陰口をたたいて人を傷つけるような者は争いを引き起こすもとななる存在だということです。このような人物は、まるで教会の中であちこちに火をつけて回っているようなものです。どんな火事も、最初は小さな火種から始まります。しかし、それが知らぬ間に大きな家や建物全体を燃え上がらせるのです。陰口も同じです。最初はひとりにだけ不満を口にするかもしれませんが、でも、その人が自分の言うことに耳を傾けてくれて、自分の状況に同情してくれればどうするかというと、その人はそのことに満足や喜びを見出して、ほかの人にも同じものを求めて話すようになるのです。最初は小さな火がいろいろなところに広がり、やがて大きな火事となってあらゆるものを燃やすようになります。そしてクリスチャンの間に争いが起きて、人々が怒りや不満で一杯になってキリストのあかしを立てられないようになれば、喜ぶのはほかのだれでもないサタンです。だからこそ、神様は争いを引き起こす中傷や陰口というものを忌み嫌われていました。私たちはみな人を傷つけるようなことばを発するのではなく、人の徳を高め、何よりも神様が喜ばれることを口にすると

して歩いていくことが求められていたのです。自分の舌をサタンに明け渡すことのないように、サタンに舌を使わせることのないように。悪口を言わないこと、これが二つ目に女性執事に求められていた資格でした。

### 3) 自分を制すること

続けて三つ目の資格として挙げられていたものは、自分を制することでした。言いかえれば、女性執事となる者は、いろいろな欲に対して慎み深く自分を制し、思慮深くあることが求められていました。この資格は以前、長老の資格を見た時に一緒に考えました。2節に「ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、」と書いてありました。その時にも言いましたけれども、自分を制する者というのは、ノーと言って断るべき時にノーと言える人物でした。いつも自分の欲求に振り回されたり、感情のおもむくまま好き勝手に生きる人物ではないのです。これも執事として仕える者にとって非常に大切なことでした。

なぜなら少し考えてみてください。執事は困っている人や苦しんでいる人など、いろいろな面でその人の必要を満たしてあげようと助けを与えようとします。犠牲を払って世話をして仕えようとするのです。でも自分のしたことに感謝されなかったり、逆に文句を言われたりしたらどうでしょう？ もしその人が自分の感情に容易に左右されるような人であれば、すぐに憤りや不満を覚えてしまったりするかもしれません。感情を爆発させて、何かしらの方法でやり返そうとするかもしれませんし、そんな態度を取るのだったら自分はもう知らない、自分はもうこの人には何もしないと、距離を取って冷たくふるまうかもしれません。感情のおもむくまま自分を満足させることだけを望むような者は、さまざまな問題を引き起こす危険になるのです。だからこそ、パウロは女性執事として仕える者は、自分を制する者でなくてはならないと訴えていました。

### 4) すべてに忠実であること

そして最後四つ目に挙げられていたのは、すべてに忠実であることでした。ここで忠実であると訳されていることばには、「信頼できる」とか「頼りになる」といった意味が含まれています。つまり女性執事となる者は、幾つかの点においてではなくて、すべての点において信頼を置くことのできる人物であることが求められていました。この人物は、自分自身の歩みに関しても、また夫や子どもといった家族、教会の人々を含めた周りの人々に関しても、神様から与えられたものであれば、それらすべてに対して忠実に仕えようとするのです。奉仕や仕事、子育てにおいても同じです。どんなことであろうが、神様のみこころにかなうことであれば、喜んで犠牲を払ってそれを行おうとするのです。もちろん、その中で難しさや苦労を経験することはたくさんあります。思いどおりに行かずに、自分の望むような結果を得られないこともあります。どれだけへりくだって仕えても、感謝もされず認められないこともあります。また、自分自身が忠実に仕えようとしている中で、周りの人たちはそうではないような、そんな姿を目にすることもあります。もし皆さんならそんな時どうします？自分の望むような結果を得ることができなければ、やったことに対する正しい評価が得られなければ、すぐに不満を覚えて、そのことをやめてしまうのでしょうか？周りの人がやっていないのを見れば、あの人もやっていないから、自分も妥協して忠実に仕えることを諦めてしまうのでしょうか？私たちはどんな人に信頼を置くことができます？私たちが信頼することができる人物は、ほかの人がどうであれ、自分は神様をいつも見上げて、どんな時も変わらず、すべてのことに誠実であろうとするような人です。すべてに忠実であること、それが私たちひとりひとりにも求められていた。私たちひとりひとりも目指すべき霊的に成熟した者の姿、そして女性執事に求められていた四つ目の資格でした。

### ○執事とその資格 12節

さて、ここまで女性執事について、11節から見てきました。次に12節をともに考えてみましょう。パウロは、この12節でもって再び執事の資格について語り始めていました。12節をもう一度見

てください。「執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。」、この箇所を読んで、皆さんももうすぐに気づかれたことかと思えます。興味深いことに、パウロはここで以前見た長老の資格と同じものを執事に対しても求めていました。ひとりの妻の夫であることを。そして子どもと家庭をよく治めることです。これらのものが執事にとっての欠かせない条件として挙げられていたのです。言い換えれば、教会を導いていく長老がそうであるように、教会に仕える執事たちもどのようなあかしをまず家庭の中で立てているかが問われていたということです。思い返してみてください。以前見たように、ひとりの妻の夫であるというのは、自分に与えられた妻を心から愛することで。性的な聖さを保って、その結婚関係において、いつも忠実であろうとすることでした。夫はからだだけでなく、心から、その思いや感情、考えに至るすべてにおいて喜んで自分の妻のために自分自身を捧げることが求められていたのです。犠牲を払って愛を示すことが重要なことでした。なぜか——。それこそがキリストが残された模範だったからです。エペソ5：25に「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」と記されていました。キリストは教会のためにご自身のからだを捧げて死なれました。文字どおりすべてのものを捧げられたのです。だとすれば、夫に求められていたのは、同じようにキリストの愛を実践していくことでした。妻の物質的な必要を満たすこともとても大切なことです。でも、同時に霊的な必要を満たすために、すべてのことを捧げているのかどうか問われていました。ひとりの妻を愛すること、忠実な夫であること、これが執事に求められていた資格だったのです。

しかし、それだけではありませんでした。パウロは同時に、子どもと家庭をよく治めることも欠かせない条件として求めていました。このことも以前見たので、ここでは詳しく見ませんけれども、これはつまり父親として子どもを心から愛し、みずから率先してリーダーシップを発揮し、家庭を導いていくことが執事として仕える者にとって非常に大切なものだったのです。

こうして考えた時に、パウロは長老に対しても、また執事に対してもその人自身が家庭でどんなあかしを立てているのかということをお問うていました。妻を愛しているのか、ひとりの妻の夫であるのかどうか、子どもや家庭をよく治めているのかどうか、そのことを繰り返し問うていたのです。そのことが最重要視されていました。皆さん、どうしてだと思えます？どうしてパウロはそのどちらにおいても、そのことを繰り返したのでしょうか？それはその人物にとって、夫婦関係や親子関係ほど親密な関係はないからでした。私たちはほかの人の前では幾らでも取り繕って見せることはできます。でも、自分の夫や妻、父親、母親、子どもの前で見せるその姿こそ、その人の本当の姿が現れるのです。だからこそ、その人物が教会で執事として仕えることができるかどうかを判断するためには、まずその人物が家庭においてどのように仕えているかを見ることでした。果たして私たちはどんな態度でもって家庭にあって仕えようとしているのでしょうか？私たちはよく知っています。これは非常に大きなチャレンジですよ。ね？私たちは家族に対しては特に仕えることよりも仕えられるということを求めていたりします。だからこそ、自分の思いどおりにならないことが起これば、すぐに不満を口にしてしまうのです。問われているのは、どんな時もキリストのように仕える者として歩んでいるのかどうかでした。私たちの責任は、主のへりくだられたその姿を覚えて家庭において忠実に仕えていくことです。そしてそれが霊的リーダーである執事に問われていた資格でした。

### **○執事に約束されたすばらしい祝福 13節**

さて、パウロは12節で執事の資格について述べた後、最後に13節でもって執事に約束されたすばらしい祝福について述べていました。13節に「というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」と記されています。「仕える」ということには確かに非常に大きな犠牲が伴います。執事としてみずからを捧げ、どれだけほかの人に仕えたとしても感謝されないようなことがあったりします。もっと言えば、感謝さ

れることよりも非難されることの方が多き時もあるかもしれません。いつも忠実に仕えていたとしても、少しミスをしたことによって不満を口にされるかもしれません。執事として教会に仕えるということにはいろいろな難しさが伴うのです。

## ●二つの祝福

だからこそ、そのことをよくわかっていたパウロは最後に言うのです。確かに執事として仕えることは大変なことだけれども、忠実に仕える執事には神様からすばらしい祝福が用意されていると。そしてそんな者に対して約束されている二つの祝福をここで挙げていました。

### a) 良い地歩を占める

まず一つ目の祝福は良い地歩を占めるということでした。13節には「**というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、**」とありました。これは言いかえれば、務めを立派に果たした人がほかの人よりも高く上げられ、すぐれた地位につくことができるということです。もちろん勘違いしてほしくないのは、何も執事がほかの人よりも立場が上になって、人々に対して偉そうにふるまうことを良しとされるようになるという話ではありません。そうではなくて、もし執事が忠実に仕えるのであれば、同じように神様を愛している兄弟姉妹たちから尊敬を集めることにつながるということです。どうか、考えてみてください。神様から与えられた責任に対して、執事がどんな時も誠実に仕えたとします。人が見ている時でも、見ていない時でも忠実に仕えたとします。そうすれば、そんな歩みを見た人たちは、こんなふう口にするのできるのです。この人は文句を口にするともなく、いつも喜んで仕えようとしている、この人はほかの人が見ている時だけでなく、見ていない時も変わることはない。だからこそ、この人にはいろいろなことを任せることができる、そんな信頼の置けるすばらしい人物だと。

このようにして、執事が教会を愛して、忠実に仕えるということは、兄弟姉妹からの称賛と尊敬を集めることへとつながっていくのです。もちろん執事も完璧ではありません。失敗をします。罪も犯します。しかし、彼らは神様や人に忠実に仕えるということがどういうことなのか、そのことを模範を立てることによって、人々の前で示そうとするのです。だからこそ、教会はそんな忠実に仕えようとしている、そのひとりひとりを見る時に尊敬を抱き、そしてこのひとりひとりに感謝することができます。私たちの浜寺聖書教会にも執事の方がおられます。教会の必要を満たそうと働いているひとりひとりに対して、私たちはその働きに感謝することができます。良い地歩を占める、これが執事に対して神様の与えられる一つ目の祝福でした。

### b) 信仰について強い確信を持つことができる

また、二つ目の祝福として挙げられていたのは、信仰について強い確信を持つことができるということでした。13節に「**また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるから**です。」と続いていました。執事として立派に務めを果たした者はよい地歩を占めるだけでなく、キリストに対する確信をさらに増し加えられるようになるということです。これもよく考えてみてください。私たちが最初に奉仕を始める時、私たちのうちにはまだまだいろいろな面で足りないところがあり、不安定なものです。例えば自分の手に負えないようなことを託されれば、いやいや、自分にはできませんよと口にして、不安や恐れに支配されることがあったりします。また仕えていく中であって、思い描いたようにいかずに、大きな難しさが降りかかってきたら、ああ、これはもう限界だ諦めようといった失意を覚えたりすることもあります。最初はさまざまな点において疑いを覚えたりすることもあるのです。でもそんな中であって、神様の助けを祈り求めながら、みことばに従って忠実に仕えようとするとうなるかという、確かに自分は弱くて力はないけれども、必ず神様が助けてくださる、そういった信仰の確信を徐々に得ることができるようになります。その人物は奉仕を通して神様に信頼することを学ぶだけでなく、実際に仕える中で、人々のうちに働かれる神様の力を目の当たりにするのです。その



ような力を目の当たりにすることによって、神様は確かに生きておられるお方なのだ、必要な助けを与えてくださるお方なのだという確信を増し加えられていくのです。

私たちはいろいろなみことばを知っています。「わたしは決してあなたを離れず、……あなたを捨てない」（ヘブル13：5）、そんなみことばを私たちは知っています。でも、そんな神様の約束がただのことばではなく、仕えることを通して、自分の中で決して揺るがない確信へと変えられていくのです。この方は自分とともにいつも歩んでくださる、この方はどんな時も変わらず助けを与えてくださるから、自分にはこの方だけで十分なのだと。こうして忠実に仕える執事は、神様やみことばに対する信頼を心のうちで堅く持つことができる者へと変えられていくのです。神様に仕えることを通して、キリストに対する揺るがぬ確信を持つことができるようになっていくのだと。

私たちは仕えることを通して、キリストに対する確信を増し加えられていく。それはすばらしいことだと思いませんか？果たして私たちは今そんな確信を持っているのでしょうか？キリストに対するその信頼が自分のうちでますます成長しているのでしょうか？もししていないのだとすれば、一つのことを問いかけてみてください。今、自分は神様と人々に仕えているのかどうかと。私たちの信仰は、ただみことばを読むだけでは成長しません。知識を蓄えるだけでは成長しません。みことばを生きることです。学んだみことばに従って忍耐をもってキリストに仕えていくことです。信仰について強い確信を持つことができる、これが忠実に仕えた執事に与えられる二つ目の祝福でした。

## 〇まとめ

さて、私たちはきょうも霊的リーダーである執事について、さまざまなことをともに見ました。女性執事について、執事の資格や忠実に働いた者に約束されている祝福について考えてきました。最後に、皆さんに一つのことを覚えていてほしいと思います。それは神様は私たちがそれぞれに与えられたその責任に対して忠実であったかどうかを問われるということです。パウロもIコリント4：1-2で「：1 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。：2 この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。」と言っていました。私たちはキリストのしもべ、仕える者として日々を歩んでいます。執事という肩書きがあろうがなかろうが、私たちはみなキリストに仕える者として、人々に仕える者として歩んでいるのです。だからこそ、家庭にあっても、職場にあっても、教会にあっても、私たちは自分自身に与えられたその働きに誠実であったかどうかということが重要になります。自分自身に与えられた妻を、自分自身に与えられた夫を愛しているかどうか、それもあなたに与えられた責任です。職場にあつて、それぞれに与えられた課題というものも、それぞれが果たしていくべき責任です。私たちにはみなそれぞれ神様から与えられた責任があります。問われることは、私たちがそれぞれに与えられたものに対して忠実であったかどうかです。確かに私たちが神様に仕え、キリストのからだに忠実であろうとすればあろうとするほど、そこには困難が伴い、失意を覚えることがあります。困っている人を助けようと手を伸ばしたとしても、その人は感謝するどころか、不平不満をあなたに口にすることもかもしれません。その人のことを思って愛をもって罪を指摘したことが攻撃と取られて関係がこじれてしまうこともあるかもしれません。親しいと思っていた友が自分の元から離れていくこともあるかもしれません。時間や体力、いろいろなものを犠牲にして仕えたとしても、何の実も得ることができないかもしれません。仕えることにおいて、わたしたちの心を悲しませ、落胆させるようなことはたくさんあります。でもそんな時に思い出してください。神様は私たちが忠実に仕えたかどうかを問われるのだと。そして責任を全うした者を神様は喜び、その歩みにふさわしい祝福を与えてくださるので

す。私たちはもう救いだけでも十分すばらしいものが与えられています。でも、それだけでなく、よくやった忠実なしもべよとその働きに報いてくださる方がおられるのです。だとすれば、私たちは喜んで主と人々に仕えていきたい、そうならないでしょうか？たとえどんな犠牲を払うことになったとしても、

主がそれよりも多くの犠牲を払ってくださったから、そんな主の犠牲によって私たちは赦されたから、この主の模範にならって仕える者として歩んでいこうとしないでしょうか？私たちの愛する主、救い主イエス・キリストは仕える者として、この世に来てくださいました。では、私たちはどんな者となることを目指しているのでしょうか？仕えられることを望む者でしょうか、それとも仕える者となることを望む者でしょうか――。